

溶接学会 若手会員の会



若手会員の会 活動報告

HP アドレス <https://jweld.jp/support/wakate-welnet/>E-mail アドレス welnet@mlist.ne.jp

この2年間の若手会員の会活動のまとめとご挨拶

委員長 鴫田 駿(東北大学)

Acknowledgements of two years activities of WELNET

by TOKITA Shun

2022, 2023 年度の2年間、若手会員の会(若手の会)運営委員会の委員長を務めさせていただきました。この2年間にわたり多大なご協力をいただきました幹事委員をはじめとした運営委員の皆様、学会事務局および業務委員会の皆様、また活動にご協力いただきました若手会員の皆様に深く御礼申し上げます。任期を終えるにあたり、本稿を執筆する機会をいただきましたので、2年間の活動を振り返りながらご挨拶をさせていただきます。

私が委員長に就任した2022年4月は、対面のイベントを制限していたコロナ禍もやや落ち着きを見せ、様々な団体がおそろおそろ対面活動を再開しはじめた頃でした。対面交流をリスタートしながらも、子育て世代も比較的参加しやすいオンライン交流の活用も続けていく、アフターコロナの若手活動を軌道に乗せることが、委員長としての大きなミッションと考えておりました。溶接業界の一大イベントであるIIW2022東京大会での若手イベント企画も就任直後に控えており、少々慌ただしいスタートとなりました。

「全国大会での若手イベント」として、春季全国大会のイブニングフォーラムと、秋季全国大会でのポスターセッションを開催させていただいております。オンライン開催となった2022年度春季全国大会では、前年のイブニングフォーラムでも使用させていただいたオンライン会議ツール Remo Conference を用いてイブニングフォーラムを開催いたしました。「若手研究者・技術者のこれまでとこれから」と題して、大学と企業の計6人にご登壇いただきました。2023年度も春季全国大会がオンライン開催となったことから、イブニングフォーラムもオンライン開催とし、「若手研究のニーズシーズマッチング」と題して企業と大学から計6人にご登壇いただきました。一方で、秋季全国大会は2022年度から対面で行われたため、ポスターセッションを対面で開催することができました。2022年度は59件、2023年度は55件のご発表をいただき、活発な議論が行われました。

「研究会・施設見学会」として、2022年度に2回(対面1回、オンライン1回)、2023年度に3回(対面1回、オンライン2回)の研究会を行いました。2022年度第1回研究会は久しぶりの対面での研究会開催となりましたが、1件あたり約40分と多めに用意した発表時間いっぱいまで議論が続き、有意義な研究会となりました。2023年度第2回研究会は日本金属学会若手研究グループ「CO2 ゼロエミッション社会に向けた耐環境構造金属材料研究グループ」との合同で開催しました。溶接学会と日本金属学会から3名ずつの若手研究者よりご講演をいただき、闊達な議論が行われました。施設見学会として、2022年は東芝エネルギーシステムズ株式会社、2023年は次世代放射光施設 NanoTerasu (ナノテラス) を訪問させていただきました。実際に溶接を行っている製品の製造工程や、2024年度から本格運用される放射光施設を見学させていただきました。ご対応いただいた皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また、若手研究者は子育てやご担当業務の関係から遠方の研究会に参加しにくい場合があり、対面開催が再開された後もオンライン開催を希望する声がちらほら聴かれたため、オンラインでの研究会開催も継続いたしました。通常の研究会に加え、2022年度には勉強会として「若手会員ネットワーク形成のためのオンライン名刺交換会」を行い、オンラインを活用した新たなネットワーク構築支援も試みました。

若手研究者が高校や高専で講義を行う「出前講義」は、高校生を相手とする性質上対面での開催に慎重になっておりましたが、講師や受け入れ学校のご協力のおかげで、2023年度から再開することができました。講師の方の負担を少なくするため、若手同士で作成した共通の講義資料を用いてご講義いただいております。受講生からは大変ご好評をいただいております。この活動を継続して少しでも多くの高校生・高専生に溶接・接合研究の魅力を伝えられればと考えております。

グローバルネットワーク活動といたしまして、IIW2022 東京大会にて、「Introduction to Research and Networking Activities by JWS-Young Researcher Group」と題した若手セッションを企画・開催いたしました。北米と東南アジアより若手研究者をお招きし、各国での若手活動の実態についてのプレゼンテーションに続いて、若手の会の研究者も交えて国際的な研究交流における課題や展望についてのパネルディスカッションを行いました。また、Young Professional 向けの Social Event の開催においても、若手の会が主導となって企画・運営をおこないました。YP Ice Breaking Session では、事前に配布した質問カードに沿って自己紹介をベースとした交流を行っていただき、Young Professional's Evening では日本の人気ゲームや伝統的な遊びを取り入れたお祭り感覚で交流を楽しんでいただきました。いずれのイベントにも多くの方にご参加いただき、大変盛況となりました。また、グローバルネットワーク活動としての新たな活動として、国際会議に挑戦する若手研究者や学生を対象とした国際会議参加費助成を 2023 年度からスタートし、2023 年度は 4 人の学生さんの国際会議参加を支援させていただきました。

これらの若手の会の活動については、本誌で毎号紙面を割いていただき、「Welnet 若手会員の会 活動報告」として掲載しております。また、「私の溶接履歴」「溶接タマゴ」といったスポットライト記事で若手の自己紹介の機会をいただいております。特集記事としては、2022 年度に「新進気鋭 - 溶接 DX の最前線に挑む若手研究者たち」、2023 年度に「2023 年度 次世代に“つなぐ”溶接・接合研究への想い」というタイトルで、企業・大学で活躍する若手研究者の皆様の記事を掲載させていただきました。執筆にご協力いただいた皆様、ならびに企画や執筆者の確保にご尽力いただいた編集担当幹事のお二人に深く御礼を申し上げます。

研究分野の発展は個々の研究者の成果の積み重ねによるものであると考えております。若手の会の運営においても、研究交流を通じて若手会員が学会活動に定着し、日々の業務に役立つ学びや人間関係を得られるような活動を目指しました。委員長就任時の若手の会の課題として、長い歴史の中で多チャンネル化された活動が効果的に運営されていないことが挙げられました。溶接分野の若手研究者が年々減

っているなか、増える一方の業務を捌くために幹事委員が複数の役割を兼任している状態が続いておりました。ご多忙のなか学会運営にご協力いただいている幹事委員の皆様も溶接分野の将来を担う大切な「若手会員」であることは言うまでもなく、学会活動のために研究時間が割かれて業務が滞るようでは本末転倒と考えました。形式化された活動は整理整頓し、若手の会活動の本分である研究交流は積極的に推し進めることをポリシーとして委員長業務に邁進しました。まずは過去の本誌の記事や当時の先生方のお話からそれぞれの活動の発足の目的や現在に至る経緯を確認することから始めました。それぞれの活動のうち、発足当初の目標を達成し、活動の変化とともに研究会との隔たりがなくなりつつあった勉強会を 2023 年度から研究会に統合し、事務的な手間を削減しました。また、当時の連携先の脱若手化や趣旨に沿った派遣学会の不在により明確な活動方針が定まっていなかった GN 活動について、国際会議参加費助成という形でさらに次の世代への支援に充てる体制を整えました。助成対象者には、じょうほう通やスポットライト記事などで学会誌への寄稿をお願いする可能性があることを同意いただき、幹事委員の中でも特に負担の大きい編集担当幹事の業務軽減にもつながるよう工夫いたしました。一方で、研究会・施設見学会の運営については、各回の見学先の決定や講演募集の担当をもっと早い段階から委員長・副委員長・担当幹事の間で分担できていれば、それぞれの業務バランスや判断フローを改善できたのではと反省しております。二年ごとにメンバーや担当が大きく変わる若手の会だからこそ、それぞれの活動をシステム化した枠組みを構築することが重要であることを学ぶよい機会となりました。

拙い運営ではございましたが、ご支援・ご協力いただいた皆様のおかげで、なんとか 2 年間の任期を務めあげることができました。幹事委員をはじめとした運営委員の皆様、ご指導いただいた業務委員会・事務局の皆様、冒頭からの繰り返しになりますが心より御礼を申し上げます。今年度からは、新委員長のもと新しい体制で活動を進めてまいります。今後とも若手会員の会へのご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。